

## 《異の空間》と《銀河の窓》の意味するところ

### 科学的宇宙観と仏教的宇宙観

この詩の下書稿に見出される《異の空間》と《銀河の窓》は、童話「銀河鉄道の夜」を読み解くキーワードである。ここでは、詩の推敲過程の検討を通じて、賢治の宇宙観を解明していく。この作業は、賢治の詩と童話の両方の生成にかかわる根源的な課題をも照射することになるはずである。

#### 一 下書稿の断層

校本宮澤賢治全集編集者である入沢康夫や天沢退二郎が早くから指摘しているように（注1）、『春と修羅』第二集（生前未刊行）所収の詩「北いつぱいの星ぞらに」「（生前未発表、大正十三年八月十七日の日付あり）は、童話「銀河鉄道の夜」（生前未発表）との密接な繋がりが認められる作品である。

本詩の六段階に及ぶ下書稿を、各下書稿間の連続性という視点から読み通してみると、そこに一つの断層というべきものの存在することに気づく。「下書稿（五）の終形」がそれであり、作品の主題が、明らかにその層を境に変化していることが指摘できる。

幸い、新修版全集及び文庫版全集の異稿欄に本文化され収められている二種の下書稿「先駆形A」「先駆形B」を読み比べることによっても主題の変化を知ることができるので、本稿においては基本的に「先駆形A」「先駆形B」を分析対象として用いることとし、校本全集校異に関しては、必要に応じて適宜引用するかたちで論を展開していきたいと考える。

なお、「先駆形A」は校本全集校異における「下書稿（三）の終形」を、「先駆形B」は「下書稿（五）の終形」をそれぞれ本文化したものである。通常目に触れにくい先駆形ということもあり、長さを厭わず次に掲げておくことにする。

#### 先駆形A

一七九 一九二四、八、一七

いちれつ並ぶおほばこが

そのうつくしいスベイドから

すこしまがった葉柄まで

くつきり黒い影を落し

月は右手の尾根の上に

夜中をすぎて熟してゐる

萱野十里も終りになって

何かなまめく櫛の木や

降るやうな虫のすだきを

路はひとすぢしらしらとして  
榊の林にはひらうつとする

(黒く寂しい香食類の探索者)

北のひっそりとした谷の  
そこにもくもく月光を吸ふ  
蒼くくすんだかすてらは  
たぶんはみんなはひ松だらう  
それはだんだんのぼって行って

ぎざぎざ黒い露岩にvari  
いまぼっかりとひとつの銀の挨拶を吐く  
それがたしかに中岳で

そこから西と東に互り  
北いつぱいの星ぞらに

ぎざぎざ浮ぶ嶺線は  
いくすぢ白いパラフィンを  
しづかに北へ発してゐる

鋼のそらの水底に  
はなたれて行く海蛇の群  
こつちはいつか中岳が

次のけむりを吐いてゐて  
その青じろい果肉のへりで  
黄水晶とエメラルドとの

花粉ぐらゐのふたつの星が  
童話のやうに婚約する  
じつに今夜の何といふそらの明るさだらう  
そらが精緻な宝石類の集成だ

金剛石の大トラストが  
獲れないふりしてしまつて置いた幾億を  
みんないちどにぶちまけたとでもいふ風だ

頭のまはりを円くそり  
鼠いろした粗布を着た  
坊主らのいふ神だの天が

いったいどこにあるかと云つて  
うかつに皮肉な天文学者が  
望遠鏡をぐるぐるさせるその天だ

するとこんどは信仰のある科学者が  
どこかの星の上あたりに  
その天を見附けようとして

やっぱり眼鏡をぐるぐるまはす  
さういふ風な明るい空だ

しかも三十三天は

やっぱりそこにたしかにあつて

木もあれば風も吹いてゐる

天人たちの恋は

相見てえん然としてわらつてやみ

食も多くは精緻であつて

香氣となつて毛孔から発する

間違ひもなく

天使もあれば神もある

たゞその神が

あるとき最高唯一と見え

あるとき一つの段階とわかる

さういふこともわからない

それら三十三天は

所感の外ではあるけれども

やっぱりそこに連互し

恐らく人の世界のこんな静な晩は

修羅も襲つて来ないのだらう

巨きな青い 一つの星が

いちばん西の鶏頭山の

ごつごつ黒い冠を

触れるともなく祝福すれば

そこから黒い雲影が

なぐめに西に互つてゐる

……雲のはかない残像が

鉄いろのそらにながれる……

にはかに藪を踊りたつ

一ぴきの黒いかうもり

またきさららかな蜘蛛の糸

……点々白い伐株と

まがりくねつた二本のかつら

草にもをどるかうもりの影…

いちいちの草穂の影さへ落ちる

この清澄な月の味爽ちかく

檜の木立の白いゴシック廻廊や

降るやうな虫の聖歌を

みちはひとすぢほそほそとして

巨きな黒の榊林

樹々のねむりを通つて行く

……アステイルベアルゲンチウム

…

アステイルベブラチニウム：

梔の脚から火星がのぞき

ひらめく萱や

月はいたやの梢にくだけ

木影の網をわくらばのやうにとぶ蛾もある

先駆形B

一七九

一九二四、八、一七

草穂の影も黒く落ち

おほばこのスピードも並んで映る

この清澄な月の味爽ちかく

櫓の木立の白いゴシック廻廊や

降るやうな虫のジロフォン

狂気のやうに狂気のやうに

銀河の窓を索めるもの

北いつぱいの星ぞらに

ぎざぎざ黒い嶺線が

手にとるやうに泛いてゐて

幾すぢ白いパラフオンを

つぎからつぎと嘖いてゐる

そこにもくもく月光を吸ふ

蒼くくすんだ海綿体

四方の天もいちめんの星

東銀河の聯邦の

ダイヤモンドのトラストが

かくしておいた宝石を

みんないちどに鋼青いろの銀河の水に

ぶちまけたとでもいったふう

それに空気が澄んでゐるので

月のあかりも苦にならず

ふだんは見えない橙いろと緑との

花粉ぐらゐの小さな星が

はつきりとして見えたりする

わたくしは狂気のやうにそらをさがす

銀河のなかで一つの星がすべったとき

はてなくひろがると思はれてゐた

そこの星のけむりをとって

あとに残した黒い傷

その恐ろしい銀河の窓は

いったいそらのどこだらう

誤ってかあるいはほんたうにか  
銀河のそとと見なされた  
星雲の数はどれだらう  
普賢菩薩が華嚴で説く  
もろもろの仏界のふしぎなかたち  
あるいは花台のかたちをなし  
あるいは円くあるいはたひら  
それはあるいはその刹那の  
覚者の意志により住し  
あるいは衆生の業により、  
あるいは因縁により住すると  
そのどれかが星雲で  
こゝからやはり見えるだらうか  
しかももしたゞ天や餓鬼  
これらの国土をもとめるならば  
そんなに遠いことでない

いちいちの草穂の影も落ち  
樹もまっくろにねむってゐる  
この清澄な月の味爽ちかくを  
きちがひのやうにきちがひのやうに  
くさむらいつばいに鳴らす虫と  
…… アステイルベ アルゲンチウム  
アステイルベ プラチニウム……  
柳の脚から火星がのぞき  
ひらめく萱や  
月はいたやの梢にだけ  
木影の網を  
わくらばのやうにとぶ蛾もある

## 二 推敲による主題の変更

まず、下書稿(五)の校異(校本全集第三卷四八〇頁)に見える次の記載に注目してみたい。

…「あゝ 削」いつまでも黒く寂しい「香食類 異の空間」の探索者……  
(右をさらに すべて削除し、右端欄外余白へ線を引き出して、次のように記入)

狂気のやうに狂気のやうに

「この原林の谷にたち 削」

銀河の窓を「もと」索「めるもの

右の推敲過程に関して、従来の研究では、「香食類」から「異の空間」さらに「銀河の窓」への推敲が、単なる《言葉の言い換え》として解釈される傾向があった。近年この詩に関して積極的な発言をしている大沢正善や大塚常樹の場合もしかりである。

つまり望遠鏡に頼る天文学者達の「所感の外」で、「三十三天」をはじめとする「もろもろの仏界のふしぎなたち」が「星雲の数」を成して存在しているというのである。「銀河のそとと見なされた星雲」とは、すでにふれた、星雲を「『天の川』」宇宙域外に散在する所の、それぞれ各自に独立した一個の宇宙」と考える島宇宙観に由来し、「もろもろの仏界」とは衆生がそれぞれの所業因縁に応じた世界に住むという十界観に由来する。

また、下書稿(五)では「狂気のやうに」「銀河の窓」や「星雲の数」を探す者を「異の空間の探索者」と記している。「銀河の窓」とは「暗黒天体」の裂目を指すと思われるが、そこから覗く不可視の「原始星床」を「異の空間」と規定しているのである。

(大沢正善「宮沢賢治と吉田源治郎」『肉眼に見える星の研究』、「奥羽大学歯学誌」第16巻第4号、平1)

例えば「北いっばいの星空に」「」の下書稿では、「いつまでも黒く寂しい香食類の探索者」の後半部分を、「異の空間の探索者」、さらに「銀河の窓を索めるもの」に書き換えている。「香食類」は他の部分から、亡き妹の中有やその転生先として考察される三十三天の天人たちを指し、それらは「所感の外ではあるけれども」やっばり星々の間に実在しているのではないかと賢治は考えている。つまりここで賢治の異空間(我々の所感外の、如来の主宰する仏国土や六道のいくつか)は銀河系の窓の彼方にあるのかもしれない、と考えてみたことを示しているのである。

(大塚常樹「宇宙科学時代の宮沢賢治」『国文学 解釈と教材の研究』平成四年九月号。のち『宮沢賢治 心象の宇宙論』朝文社・平5、に加筆して再録)

賢治の宇宙観を《島宇宙説》に基づくとみる大沢と、《島宇宙説》に懐疑的であったとみる大塚とを同一に論ずることはできないが、「異空間」と「銀河の窓」との関係にのみ焦点を絞れば、この詩において賢治は「異空間」の所在を「銀河の窓」の向こう側に想定していたという点において、同じ解釈の立場に立つといえる。

しかしその場合、例えば次の詩句などを、両氏はどのように読み取るのだろうか。

しかももしたゞ天や餓鬼

これらの国土をもとめるならば

そんなに遠いことでない

(「先駆形B」 46～48行目)

両氏の文脈からいえば、「天や餓鬼」は、「異空間」に住む者であるが故に、必然的に

「銀河の窓」の向こう側に存在することになる。しかるに、賢治は「これらの国土をもとめるならば／そんなに遠いことでない」と記しているのである。これはどうしたことが。大沢、大塚両氏の立論にはどこか誤謬があると考えざるを得ない。

おそらく両氏の誤謬は、下書稿の各層を重ね合わせ、透かし見るかたちで賢治の宇宙観を組み立てようとした結果生じたもののように思う。他の作品の推敲例が示すように、賢治の推敲は時として主題の変更を含む場合があり、その意味で、「香食類」「異の空間」「銀河の窓」の推敲も、単なる字句の差し換えに留まらない可能性のあることを考慮すべきである。

先に引用した校本校異を文庫版全集異稿に対応させた場合、「黒く寂しい香食類の探索者」の詩句が「先駆形A」に、「狂気のやうに狂気のやうに／銀河の窓を索めるもの」の詩句が「先駆形B」に、それぞれ含まれることになることは偶然ではない。「先駆形A」と「先駆形B」はそれぞれ異なる主題のもとに書かれた作品と捉え直すべきなのである。何故なら、そのように仮定したときに初めて、「天や餓鬼」の存在する世界が「銀河の窓」の向こう側ではなく、「そんなに遠いことではない」ことが了解されるからだ。私は「先駆形A」と「先駆形B」との主題の相違を立証するために、まず、「異の空間」と「銀河の窓」との意味する空間の異質性を明らかにしようと思つ。《天人》を意味する「香食類」注2(1)に関しては、後に述べる理由により「異の空間」とほぼ同義と推定されるので、ここでは論の展開の都合上、「香食類」を「異の空間」に吸収させ、「異の空間」と「銀河の窓」とを対立項として取り上げることとする。

「異の空間」に関して、賢治は幾つかのメモ書きを残しているので、それらを分析することによってある程度の定義づけが可能である。例えば次のメモである。

わが少数の読者よ、

わが打ち秘めし

異事の数、

異空間の断片

(1)「兄妹像手帳」メモ

このメモに見える「異空間」の用例は、他言することが憚られるような異世界を、賢治が実際に体験していたことを伝えている。

一、 異空間の実在 天と餓鬼、分子 原子 電子 真空 異単元 異構成

幻想及夢と実在

二、 菩薩仏並に諸他八界依正の実在

内省及実行による証明

(1)「東の雲はやくも蜜のいろに燃え」 「下書稿」(二)裏面メモ

このメモによれば、「異空間」とは「天と餓鬼」によって代表される生き物の住む世界であり、賢治にとって「幻想」や「夢」として知覚され、確かに実在すると信じられている世界である。「菩薩仏並に諸他八界依正」との関係でいうなら、「異空間」とは「菩薩仏並に諸他八界依正」のうちの《天界》と《餓鬼界》との二界に対応している、と賢治は考

えていたようだ（それ故、先にふれた《天人》を意味する「香食類」は「異の空間」の概念によってほぼ包含されると考えられる）。

また、童話「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」（生前未発表、推定成立期大正一〇、一一年頃）や童話「インドラの網」（生前未発表、推定成立期大正十二年頃）、詩「阿耨達池幻想曲」（生前未発表、『春と修羅』詩稿補遺）、詩「晴天恣意」（生前未発表、『春と修羅』第二集所収、大正一三年三月二五日の日付あり）などを調べてみれば分かることである（注3）が、「異空間」と推定される全ての例は、「先駆形B」にいう「そんなに遠いことではない」範囲に限定されており、かつ、体験可能な世界として描き出されていることが特徴として指摘できる。

それに対し、「銀河の窓」の向こう側の世界が、体験不可能な空間として描かれていることは重要な相違点である。例えば、「銀河鉄道の夜」に描かれる「石炭袋」は、「銀河の窓」として想定し得る唯一の例である（注4）が、「石炭袋」の向こう側の世界の描かれることはなかった。その意味で、ジヨバンニを乗せた《銀河鉄道》の走る空間を「異空間」と呼ぶことはできても、《銀河鉄道》の走ることのできない「銀河の窓」の向こう側の世界を「異空間」と呼ぶことはできない。「異空間」すなわち《天界》や《餓鬼界》と「銀河の窓」の向こう側の世界とは、明確に区別されねばならない空間なのである。

振り返って校本校異の推敲過程を見ると、「右をさらに すべて削除し」となっており、この事実はその推敲が、「異の空間」の語を消して「銀河の窓」の語を書き込むというような単純な語の入れ換えではなく、詩全体の解釈から帰納せざるを得ない推敲であったことを示しているといえるのである。

### 三 科学的宇宙観と仏教的宇宙観との調和

周知のように、賢治の《宇宙観》の特徴は、科学的宇宙観と仏教的宇宙観との融合にある。本詩から読み取れる《宇宙観》もまさにそれで、科学的宇宙観に立ちながら仏教的宇宙観を展開するという、賢治独自の《宇宙観》が披瀝されているのである。

「先駆形A」では《天界》の問題が、「先駆形B」では《仏界》の問題が、それぞれ中心的課題として扱われているというのが私の基本的な読みの立場であるが、肝要なのは、仏教的宇宙観に基づく《天界》や《仏界》の存在が、賢治の科学的宇宙観においてどのような形で整合性を保っていたかである。賢治には科学の発展が必ず仏教宇宙の証明に帰着するという確信があった。おそらく賢治は、《天界》を《太陽系》に、《仏界》を《銀河系》にそれぞれ対応させた宇宙観をつくりあげることによって、仏教的宇宙観と科学的宇宙観の融合を果たしていたのである。その例として次のようなものがあげられる。

それではおれがどこからか

神を見附けてやらうと行って

火星木星金星と

（「下書稿（五）の1」校本全集第三卷四八二頁）

この校異は「下書稿B」の一段階前の推敲、つまり、主題的には「先駆形A」の延長に

あたると考えられるものだが、「神」は「天」の語を書き直したもので、賢治は「天」を見つげようとして「火星木星金星」に目を向けていることが分かる。このことは、賢治が《太陽系》内の惑星に《天界》の所在を求めていたことを意味する。これが単なる賢治の思い付きの表現でないことは、賢治が妹とし子の転生先を、次の二詩において、前記引用箇所同様《太陽系》内の惑星に想定している事実からも指摘できる。

とし子とし子

野原へ来れば

また風の中に立てば

きつとおまへをおもひだす

おまへはその大きな木星のうへに居るのか

(「風林」『春と修羅』第一集)

どうかこれが兜卒の天の食に変わつて

やがてはおまへとみんなとに

聖い資糧をもたらすことを

(「永訣の朝」『春と修羅』第一集、宮沢家所蔵自筆手入れ本)

もつとも、《天界》と《太陽系》惑星とを対応させる宇宙観は、賢治独自のものというよりは、例えばフリーエの「宇宙開闢説」にみられるような、死後靈魂が隣の惑星に移るといふ一九世紀西欧の転生思想を取り入れた結果であることと推定できる(注5)。

賢治が《天界》の所在を《太陽系》内に想定していたその根底には、《太陽系》が仏教でいう《一世界》に当てはまることへの確信があったはずである。須彌山を中心とした《一世界》には、我々の住む人の世界はもちろんのこと、地獄から天界までの六道が含まれており、太陽も《一世界》の一つである。賢治の宇宙観の基本単位が《地球》ではなく《太陽系》であったことは、従来あまり指摘されていないが、「異空間」の实在を信じる賢治にとつては必然であったように思う。「農民芸術概論綱要」に「ここは銀河の空間の太陽日本 陸中国の野原である」と記されているが、「太陽日本」という表現に、賢治の《太陽系》意識を読み取ることができる。

となれば、何億個もの太陽が存在する《銀河系》とは、仏教でいう《三千大千世界》すなわち《仏界》に対応しているはずで、後に詳述するが、賢治にとつての《銀河系》の意味の重さも、《仏界》との関わりにおいて納得されてくるのである。

さて、「先駆形A」の詩では何ゆえ《天界》が問題となるのか。

詩句の表層においては、星々の美しさに魅せられた賢治が《天界》に関する連想を思いつくままに書き留めたものと読み取れるが、《天界》に関する連想が賢治に作用した理由は決して単純とは思われない。私は、《性欲》という賢治にとつて抜き差しならない問題がこの詩の根底に潜んでいるのではないかと考えている。

この作品の下書稿(一)におけるタイトルは「谷の味爽に関する童話風の構想」であった。この「童話風」のイメージは「先駆形A」においては、次のような詩句に引き継がれている。

黄水晶とエメラルドとの  
花粉ぐらゐの二つの星が

童話のやうに婚約する

(「先駆形A」 31～33行目)

《天界》との関わりで解釈を進めるならば、「童話のやうに婚約する」とは、《非性的》な「婚約」と読み取るべきである。なぜなら、「童話風」や「童話のやうに」の語が、賢治の《性欲》意識の裏返しとして意味の重みを持つからである。

この点に関して論ずるためには、まず、この詩の約一カ月前の日付をもつ、「温く含んだ南の風に」(生前未発表、『春と修羅』第二集所収)という詩に触れておかなければならない。「温く含んだ南の風に」は「密教風の誘惑」という初期段階のタイトルをもつ作品として知られるが、「密教風の誘惑」と「谷の味爽に関する童話風の構想」とは、ともに《星空》を扱ったものとして共通性が認められ、これら二つの作品を一对の詩として読むことによつて、賢治における《性欲》の問題が浮き彫りになってくる。つまり、同じ《星空》を扱いながらも、「密教風の誘惑」の《隱微さ》に対して「谷の味爽に関する童話的構想」の《さわやかさ》という書き分けがなされており、その書き分けの意味が、賢治における《性欲》の在りようの差の問題として読み解けるのである。《性欲》の問題がいかに深く「密教風の誘惑」に関わっているかについては、拙著『宮沢賢治 幻想空間の構造』第九章で詳しく論じたので、参照していただきたい。

こつして、賢治が「童話のやうに」と表現した《性欲》の問題は、仏教宇宙の解説書である「俱舍論」を仲立ちとして、《天界》の問題に結び付くことになる。

夜摩天の衆は纒かに抱きて、姪を成ず。 觀史多天は、但だ手を執るに由る。 樂變化天は、相向ひて笑む。 他化自在天は相視て、姪を成ず。

(『国訳大蔵経』「阿毘達磨俱舍論」本論第三 世間及世界)

「俱舍論」によれば、位の高い天人ほど人間界の《性欲》の在りようから解放されているとされるのである。

しかも三十三天は

やつぱりそこにたしかにあって

木もあれば風も吹いてゐる

天人たちの恋は

相見てえん然としてわらつてやみ

(「先駆形A」 50～54行目)

「天人たちの恋はノ相見てえん然としてわらつてやみ」とは、《人界》の住民としての《性欲》をもたざるを得ない賢治にとつて、「天人たちの恋」こそがより本来的な《性欲》のありようである、と認識されていたことを示している。おそらく、「谷の味爽に関する童話風の構想」を書き留めた夜の賢治は、いわゆる《性欲》からは解放されていたのであり、それ故、「黄水晶とエメラルドとのノ花粉ぐらゐの二つの星がノ童話のやうに婚約する」という、十分《性的》な内容であるにもかかわらず《さわやかな》な詩句が生まれたので

あろうと考えられるのである。

また、同じく「先駆形A」に記されている「恐らく人の世界のこんな静かな晩は／修羅も襲つて来ないのだらう」(66～67行目)の詩句も注目に値する。仏教教義からいえば、「修羅」が襲つるのは帝釈天宮ということになるが、この場合の《修羅》は賢治の内なる修羅とも響きあっているはずで、帝釈天宮に「修羅も襲つて来ないだらう」とは、《修羅》に襲われることのない、すなわち《性欲》を自覚する必要のない、その晩の賢治の心の平穩さを象徴していると思われるのである。

賢治が確かに読んでいたと推定される(注6)『慈雲尊者の』十善法語の「不邪婬戒」の項に、《修羅》と《愛欲》との関わりに触れた箇所があるので傍証として引用しておくたい。

此心身愛欲に随順すれば、此の世界悉く執着となる。流れて我慢となり、或は騰争を起す。畜生界、阿修羅界も、これより構造するぢや。

#### 四 「銀河の窓」の意味するもの

さて、次に「先駆形B」に論を移したい。

銀河のなかで一つの星がすべったときは  
はてなくひろがると思はれてゐた

そこらの星のけむりをとって

あとに残した黒い傷

その恐ろしい銀河の窓は

いったいそのどこだらう

(「先駆形B」27～32行目)

「銀河の窓」の向こう側は「異空間」ではない、という私見に沿ってこれらの詩句を読み取るならば、「恐ろしい銀河の窓」とは《銀河系》宇宙の破綻の兆しに外ならない。

「銀河の窓」が「銀河鉄道の夜」に描かれる「石炭袋」であることはすでに述べた(注7)が、大塚常樹によれば、「石炭袋」の成因に関して賢治はアレニウスの著作から知識を得、それを「先駆形B」に取り込んでいるとされる。また、大沢正善が詳しく論じた吉田源治郎の『肉眼に見える星の研究』(大11・8)には、「石炭袋」に関して、「昔から、一種の畏怖を以て仰望されたのも無理はありません。我々は、此処に於て、『見える宇宙』そのものを貫いて、『星々の彼方の暗黒』を覗くわけでありませぬ。」と記されている。つまり、賢治が作中に「銀河の窓」や「石炭袋」を書き込んだ背景には、それなりの科学的根拠があったわけである。

とはいえ、「先駆形B」や「銀河鉄道の夜」におけるあの緊迫感が、科学的書物から得た知識によってのみ形成されたとは考えにくい。賢治にとつての「銀河の窓」や「石炭袋」の「恐ろしさ」とは、賢治の存在そのものに関わる「恐ろしさ」でなくてはならない。「恐ろしい銀河の窓」の箇所の異稿には、「それは悪魔の考えだ」とさえ記されているのである。

ここで、すでに提示した、「先駆形B」の主題を《仏界》の問題に見るといふ視点が意味を帯びてくる。「銀河の窓」とは、賢治にとって《銀河系》宇宙の破綻であると同時に、《仏界》の破綻を意味していたのではなかったか。というのも、拙著『宮沢賢治幻想空間の構造』第九章で指摘しておいたことだが、賢治にとって銀河の星々は《曼陀羅》として認識されており、「銀河の窓」が《曼陀羅》の一部欠損として、すなわち《仏界》の破綻として賢治に受け取られた可能性が高いのである。

さらに、賢治の宇宙観が本質的には《生命体》宇宙観であったと考えられることも、「銀河の窓」の意味するところを考察するうえで欠かすことのできない要素である。

例えば、賢治は晩年近いころの書簡断片に「宇宙意志」という言葉を残しているが、賢治にとって宇宙とは、「意志」を持った一つの生命体として捉えられている。おそらく、この《生命体》宇宙観は、次に引用する国柱会の田中智学の教学から直接的に影響を受けたものである。

宇宙万象はこれ真理の顕現であるから、宇宙即真理である。思想的にいふと宇宙の現象の用をつかまへて真理といふたものである。真理があつて後に宇宙が出来たものでなく、宇宙ありて此に真理があるのである。現象があつてその中に理が含まれてゐるのである。宇宙なく現象がなければ、真理といふものはある訳はない。現象已外何物もないとなれば、現象即実在、宇宙即真理である。宇宙則真理といふ真理そのものを集積し、醇化したところに一の代表的大勢力大功徳力を認めて仏といふのである。

(『本化妙宗式目講義録』第四卷宗要門第三 第二段宗旨三秘 第三科無作三身)

これらの智学の言辞から、賢治が「青森挽歌」(『春と修羅』第一集)に記した「そらや愛やりんごや風 すべての勢力のたのしい根源ノ万象同帰のそのいみじい生物の名を」の詩句を連想することはたやすい。智学は別の箇所で「されば本仏とは、法界万有の本源的中心的勢力をいふのである。法界万有は、この本仏を中心として、つねに一定の軌道を辿るべきことは、てうど地球が太陽の軌道をまはりつゝあると同じことである」とも述べており、賢治は、「法界」としての《宇宙》と科学的な《宇宙》とを融合可能なものと捉え、その理論的延長として、科学的な《宇宙》＝《仏》という思想を抱くに至ったと考えられる。

とはいえ、賢治の生命体《宇宙》観が成立するためには、賢治の科学的宇宙観が基本的には鳥宇宙以前の《宇宙》＝《銀河系》説であったという前提がなければならない。何故なら、「農民芸術概論綱要」に「新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にあるノ正しく強く強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに依じて行くことである」と記されたように、賢治の《銀河系》意識は明らかに《宇宙》＝《銀河系》説宇宙観に基づいていると推測されるからである。その点、「先駆形B」に記された「誤ってかあるいはほんたうにかノ銀河のそととみなされた」(33～34行目)の詩句は、賢治が当時の新しい宇宙観としての鳥宇宙説に対して、科学的に未確定の説という捉え方をしていたことを示しており、賢治にとっての《宇宙》が基本的には《銀河系》を超えるものでなく、従って、「銀河系を自らの中に意識する」(前出)とは「仏を自らの中に意識する」ことと同

義であったことを知ることができる。

このように賢治における《銀河系》の意味を辿ってくるならば、生命体宇宙としての《銀河系》に底知れぬ「虚無」の窓の存在することを、賢治が《仏界》の破綻として捉えた、と推定することは十分に根拠のあることといえよう。賢治にとって「銀河の窓」以上に由々しき問題はないのである。

仏教における「四劫」の考えに従えば、賢治は「銀河の窓」を「四劫」の内の「壊劫」の予感として恐れていたとの仮説を立てることも可能である。「四劫」とは「此の世界の成立より破壊を経て次の成立に至るまでの四大時期」(『望月仏教大辞典』)のことで、「壊劫」とは「世間災漸く起り、この世を壊する時、中間長久なること無量無限にして、日月歳数を以て称計すべからざるなり」(同)とされ、世界が崩壊に向かう無限に長い時期のことである。賢治は、詩「南のはてが」(生前未発表、『春と修羅』第二集所収、大正十三年十月四日の日付あり)の下書稿(二)に「劫初の風」の語を用いており、「壊劫」に関する知識を有していたことは確実といえる。

さて、いよいよ「銀河の窓」の問題に移らなければならぬ。

「その恐ろしい銀河の窓はノいったいそれらのごとだらう」と、《仏界》の崩壊の予感に怯える賢治ではあるが、すぐ次の行で、「誤ってかあるいはほんたうにかノ銀河のそとと見なされたノ星雲の数はどれだらう」と、《銀河系》の外に存在するかもしれない「星雲」を探すことになる。《銀河系》が一つの《仏界》であるならば、「銀河のそとと見なされる」「星雲」もまた一つの《仏界》であるはずだ。

普賢菩薩が華嚴で説く

もろもろの仏界のふしぎなかたち

あるいは花台のかたちをなし

あるいは円くあるいははたひら

それはあるいはその刹那の

覚者の意志により住し

あるいは衆生の業により、

あるいは因縁により住すると

そのどれかが星雲で

こゝからやはり見えるだらうか

(『先駆形B』36～45行目)

賢治は、「普賢菩薩」が「華嚴経」で説いた諸々の《仏界》が、「星雲」としてここから見えるだろうか、と考えているのである(注8)。ということは、ここには、「星雲」が《仏界》であることの確認こそが「銀河の窓」を恐れずにすむための条件であるような論理が隠されているはずである。それを知るための鍵が「華嚴経」にある。

一切の塵に等しき諸仏の刹は、普賢菩薩の一念に起り、無量劫に行じて衆生を化し、法界に充滿して自在を現す。

仏子よ、諸の世界海に種種の形あり。或は方、或は円、或は方円に非ず、或は水のす

るが故く、或は復た華の形の如く、或は種種の衆生の形をなす者あり。

(『国訳大蔵経』「国訳大方広華嚴經」盧舍那仏品第二)

「華嚴經」には、諸々の《仏界》の存在することが述べられている。例えば、我々のすむ世界の教主である盧舍那仏のそれは「蓮華藏莊嚴世界」であり、東には「淨蓮華勝光莊嚴」と呼ばれる《仏界》が、南には「衆宝月光莊嚴藏」と呼ばれる《仏界》がそれぞれ存在するといふように、「蓮華藏莊嚴世界」の東西南北上下無数に《仏界》が存在するのである。

ここで「華嚴經」宇宙に賢治の宇宙観を対応させて考えると、《銀河系》が「蓮華藏莊嚴世界」に、銀河系外にある《星雲》が「淨蓮華勝光莊嚴」や「衆宝月光莊嚴藏」に当たるといふことになるのではなからうか。すると、引用した「一切の塵に等しき諸仏の刹は、普賢菩薩の一念に起り……」の経文が「諸々の《仏界》は普賢菩薩の願行によつて在らしめられている」との意に読めることから、「普賢菩薩が華嚴で説く／もろもろの仏界のふしぎな私たち」の「どれかが星雲で／こゝからやはり見えるだらうか」の詩句は、「『銀河の窓』の向こう側に、『星雲』として《仏界》が見えるならば、この宇宙は現に普賢菩薩が修行したまう世界のはずだ」といふ願いに支えられた言葉であることが理解されるのである。

では、「もろもろの仏界のふしぎな私たち」である「花台のかたち」や「円」「たひらな《仏界》と、銀河系の外の存在として見える(はず)の《星雲》とは、賢治の中でどのように結び合っていたのだらうか。私が特に注目するのが、「水の するが如」(前出引用文)き形をした《仏界》の存在することである。賢治はこの「水の するが如」(前出)かたちに関して詩中に書き込むことをしていないが、読み落とした結果とは考えられない。『国訳大蔵経』(注9)脚注によれば、「水の するが如」き形とは「水深くうづまきて流るゝ貌なり」であり、《渦巻き状》の形といえる。この《渦巻き状》の《仏界》の存在こそが、「銀河の外と見なされた」《渦巻き状》の《星雲》を《仏界》として認識し得る可能性を賢治にもたらしたのではないかと推定されるのである。

ここにおける賢治の宇宙観は、明らかに島宇宙説的である。より賢治の心情に即せば、あるべき姿としての島宇宙説への期待があったといえる。賢治は《仏界》の崩壊の予感を科学的に打ち消すために、島宇宙説を取り入れるかたちで宇宙の概念を拡大させようとしたのではないだらうか。それを仏教の側から理論的に裏付けることのできる経典が「華嚴經」であったのだ。しかし、賢治はその確証を科学的にも宗教的にも掴むことはなかった。それ故、いみじくも大塚常樹が指摘しているように、「もし石炭袋＝暗黒星雲という知識や島宇宙説への信頼が賢治に充分あったなら『銀河鉄道の夜』は全く別の物になったに違いない」ともい得るのである。

## 六 詩稿書き換えの本質

さて、以上でほぼ「先駆形A」「先駆形B」に関する私の基本的読解を提示し終えた。「先駆形A」から「先駆形B」への書き換えは、単なる字句の差し替えや表現の工夫といったレベルに留まる問題でなく、対象となる宇宙空間の拡大を伴う本質的な書き換えであった。科学的空間としては《太陽系》から《銀河系》へ、仏教的空間としては《天界》か

ら《仏界》へと拡大し、それぞれ、銀河＝宇宙説から島宇宙説へ、俱舎論から華嚴経へと認識の核となる思想を移しながら、書き換えはなされていったのである。

ただ、「先駆形A」から「先駆形B」への書き換えが、後者が前者を否定するかたちで成立しているわけではなく、私が「拡大」という語を用いたように、後者が前者を包含するかたちで成立していることは確認しておく必要がある。「先駆形A」と「先駆形B」とは矛盾なく併存しているものであり、ただわれわれが、「先駆形A」と「先駆形B」とを重ね合わせて読もうとした場合、「そんなに遠いことでない」「はずの「天や餓鬼」の「国土」が「銀河の窓」の向こう側に存在する、という矛盾が生ずるのである。

それにしても、この書き換えはいつ行われたのだろうか。「銀河鉄道の夜」の生成との関わりを追究するためには、どうしても考察しておかなければならない事柄である。

校本全集編集者の推定をもとに考察を進めるならば、「北いっばいの星ぞらに」の下書稿(一)に用いられた赤野詩稿用紙の使用上限は「大正十五年(昭和元年)の終わりか昭和二年のはじめ頃」であり、下書稿(一)の段階ですでに、初稿スケッチの成立した大正一三年八月十七日から二年以上のひらきが認められるのである。問題の下書稿(五)は同じく赤野詩稿用紙に記されているが、下書稿(六)の記された黄野詩稿用紙使用の一段階前であることから、黄野詩稿用紙の推定使用時期である「昭和五年頃から七年頃」の少し前まで成立時期の下がる可能性がある。

一方、「銀河鉄道の夜」の成立時期であるが、鉛筆書きの第一次稿が「大正十三年の十二月頃」までには成立していたと推定されており、その時点ですでに「石炭袋」が書き込まれていた点が注目される。従って、「石炭袋」すなわち「銀河の窓」のモチーフは「北いっばいの星ぞらに」(「下書稿B」)から「銀河鉄道の夜」に流れ込んだのではなく、逆に「銀河鉄道の夜」から「北いっばいの星ぞらに」に流れ込んだとの推定が成り立つ。

しかし、「銀河鉄道の夜」の「銀河の窓」を除く各部分の発想は、「北いっばいの星ぞらに」(「先駆形A」)や、その一月前の日付を有す「薤露青」等のいわゆる「一九二四年七月・八月詩群」とかなりの点で共通性が見いだされ(注10)、作品生成の順序としては、やはり、「北いっばいの星ぞらに」(「初稿スケッチ」を含む「一九二四年七月・八月詩群」)が先で、その後「銀河鉄道の夜」(第一次稿)が書かれたと考えた方が自然である。

となれば、現時点で推定し得ることはほぼ次のようなことになる。「北いっばいの星ぞらに」がスケッチされた大正十三年八月、賢治はすでに「銀河の窓(石炭袋)」に関する何らかの知識を有していたと推定されるが、「銀河の窓(石炭袋)」は「北いっばいの星ぞらに」のスケッチに取り込まれるには至らず、スケッチは、その夜の賢治の関心事であった《天界》の所在の問題を中心に展開された。その後、おそらく数カ月を経ずして、「石炭袋」の最終部を含む「銀河鉄道の夜」(第一次稿)が成立したが、「北いっばいの星ぞらに」は、《天界》を主題とするかたちで推敲が進められていき、「昭和五年から七年頃」(黄野詩稿用紙使用時期)までには、「銀河鉄道の夜」と同じ宇宙観に基づく作品「下書稿B」に書き換えられていた。

下書稿(一)～(六)を有す「北いっばいの星ぞらに」と、第一次稿～第四次稿を有す「銀河鉄道の夜」。両作の密接で複雑な関係は、未だその全体の姿を現したわけでは

ない。拙稿が賢治における詩と童話の生成の秘密を解く一つの礎にでもなり得れば幸いである。

最後に、賢治にとっての詩と童話に対する覚悟のようなものに触れておきたい。

「先駆形B」の詩において、賢治が「銀河の窓」の向こう側に《星雲》を探し求めたことと、「銀河鉄道の夜」において、主人公ジョバンニが「石炭袋」の中に飛び込む勇氣をもち得たことは、賢治がいかに己れの生と作品創造とを密接に連関させていたかを証しており、心うたれる思いがする。詩において賢治は、「銀河の窓」の向こう側に《星雲》を見出し得ず、童話においてジョバンニは、「石炭袋」の中に突き進み得たか定かではない。しかしそれでも、賢治とジョバンニが、この宇宙が仏の力によって在らしめられていることを信じ続けたことは確かである。なぜなら、賢治が農民として生きようとし、ジョバンニが苦しみが多い現実世界に戻ってきたことそれ自体が、この宇宙が仏の力によって在らしめられていることへの、彼らの生涯をかけた証明に外ならないからである。賢治がメモに記した「内省及実行による証明」（前出）の「実行」とは、このことを指すに違いない。

#### 注

(1) 『薙露青』解説 (1) 「ユリイカ」昭47・8月号。『討議「銀河鉄道の夜」』とは何か『昭51、青土社に再録』

(2) 「阿毘達磨俱舍論」本論第三世間及世界(『国訳大蔵経』)に香を食す生き物について記した箇所があり、「香食類」の語の出典と考えられる。香を食す生き物には「中有」「天」「劫初」の三種があるとする。

(3) 童話「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」

三十人の部下たちがまはりに集まって実に心配さうにしてゐます。／＼あゝ僕はどつしたんだらう。／＼只今空から落ちておいでございました。ご気分はいかがですか

童話「インドラの網」

(たうたうまぎれ込んだ、人の世界のツエラ高原の空間から天の空間へふつとまぎれこんだのだ。)

詩「阿耨達池幻想曲」

虚空に小さな裂罅ができるにさうしない／＼……その虚空こそ／＼ちがった極微の所感  
体／異の空間への媒介者…… 略 もうわたくしは阿耨達池の白い渚に立つてゐる

詩「晴天恣意」

つめたくうららかな蒼穹のはて／五輪峠の上のあたりに／白く巨きな仏頂体が立ちますと／数字につかれたわたくしの眼は／ひとたびそれを異の空間の／高貴な塔とも愕ろきますが／畢竟あれは 略 まはゆい積雲です

(4) 「銀河の窓」に類似したイメージとして、童話「鳥の北斗七星」に見られる《空のひび》感覚が挙げられるが、詩「阿耨達池幻想曲」に見られる同じ《空のひび》感覚が、童話「インドラの網」の「天の空間」と同質であると判断できることから、その世界に紛れ込むことがあり得るような「異空間」の一種として理解が可能だと考える。

また、詩「温く含んだ南の風に」「に見られる「西藏魔神」も「銀河の窓」を連想させるが、これは文脈から推定して明らかに星空にかかる雲のことであり、問題意識としては《天界》に関わることゆえ、「銀河の窓」とは異質と推定される。(5)フリーエの「宇宙開闢説」によれば、「天体は一個の生物であり、そこに居住するものはいずれも道徳や知性などの点ではその天体よりも劣っていてやはり永く遠の靈魂をもっている。個体が死ぬとその靈魂は隣りの空間に移り、それから」との遊星の別の住民に生まれかわって戻ってくる「(フロンソワ・グレコワール著 『死後の世界』クセジユ文庫より引用)とされる。

当時における賢治との接点等の文献的調査は未了である。

(6) 詩「不貪慾戒」(『春と修羅』第一集所収)に「慈雲尊者にしたがへば／不貪慾戒のすがたです」の詩句が見られる。

(7) 吉田源治郎の『肉眼に見える星の研究』に従えば、賢治が「銀河の窓」と呼んだ「石炭袋」は「北の石炭袋」にあたり、「銀河鉄道の夜」における「石炭袋」は「南の石炭袋」にあたる。

(8) 本詩と「華嚴経」との関わりについて論じた先駆的研究として、亀井茂の「賢治と早地峯」(『詩・二題を中心にして』「早地峯」第5号、昭51)がある。

(9) 小倉豊文作成の「宮沢賢治所蔵函書目録」に「国訳大蔵経」(国民文庫刊行会刊)が含まれており、賢治は『国訳大蔵経』で「華嚴経」を読んだ可能性が高い。

(10) 「銀河鉄道の夜」と「一九二四年七月・八月詩群」との共通性に関しては、注(1)の「『薙露青』解説」に指摘がある。私見は稿を改めて述べることにしたい。

#### 第四章 「北いっばいの星ぞらに」研究・2

##### 《一七九》草稿群の成立と解体

転生する《心象》

#### 一 《versions》

《一七九》草稿群とは、校本全集において「北いっばいの星ぞらに」(『春と修羅』第二集)のタイトルのもと、下書稿一から下書稿六におよぶ、賢治詩中最も複雑な推敲過程を有す草稿群のことである。賢治童話の代表作である「銀河鉄道の夜」とも密接な関連が指摘されており、私自身、『北いっばいの星ぞらに』試読 《異の空間》と《銀河の窓》の意味するところ」(『日本近代文学』第49集、平5。前章第三章所収)と題し、すでに考察を試みたことがある。当時の読みと現在の読みに基本的な変化があるわけではないので、以下述べることの多くは重複したものとならざるを得ないが、今回は特に、天沢退二郎の企図する《versions》なる視点から改めて本草稿群を読み返してみたいと考える。

前出拙論において私の主張したことの要諦は、六段階に及ぶ下書稿は下書稿五の「手入れ」までと同「手入れ」以降とで区分でき、それは作品の主題の変化に対応するということであった。前者は《天界》を、後者は《仏界》を主たる思索対象にしているというのが私見である。しかし《versions》としての視点をとった場合、拙論のとった二分法では

不十分であることに気づいた。《一七九》草稿群は、基本的に三分割して考察すべきであり、さらに、オリジナル版に関する考察も必要となる。私が拙論において考察したものは三種のヴァージョンのうち二種で、オリジナル版の考察に関しては、全く埋没してしまっていたことになる。では、オリジナル版に当たるものはどれなのか。「一九二四、八、一七」という日付においてスケッチされたものがまさにそれなのだが、手帳のようなものに走り書きされていたはずであり、残念ながら現存していない。現存草稿はすべて原稿用紙（下書稿一〜五は赤罫詩稿用紙、六は黄罫詩稿用紙）に書き込まれたものである。

手帳 ノート 原稿用紙の順に改稿が進んだとすれば、われわれの目にする《一七九》草稿群とは、すでに「一九二四、八、一七」の日付から隔たった時点での《心象スケッチ》であり、これに《versions》の概念を投影させれば、《一七九》草稿群それ自体がヴァージョンの集積体を意味することになる。例えば、「雨ニモマケズ」は《手帳》に書かれており、形態の上から見れば明らかなオリジナル版であるが、それと、原稿用紙に書かれた《一七九》草稿群のようなヴァージョン群とを、どのような関係において捉えるべきなのか。ワープロソフトなどで用いるヴァージョンアップなる関係の当てはまらないことはいうまでもない。おそらく、《化石を含んだ地層》にたとえられるように思う。どの地層面を割るかによって現れる化石の種類は異なるが、化石そのものは確実にその地層の時代を語り、化石の異なりは価値の異なりを意味しない。

それにしても賢治は、なぜ、「一九二四、八、一七」という日付を、下書稿一から下書稿六の各段階（下書稿四を除く）に記し続けたのか。使用原稿用紙の調査から、その間少なくとも五、六年の経過が推定されており、また、スケッチの当日から下書稿一までの《手帳》《ノート》段階の時間的経過も考慮されねばならないだろう。賢治はオリジナル版をあえて消し去る意図をもっていったかのようである。ここで想起されるのが、『春と修羅』序の「（ひかりはたまち、その電燈は失はれ）」の詩句である。この詩句は「わたくしという現象」の存在について述べたもので、引用として必ずしも適切ではないが、光源としての「電燈（オリジナル版）」が失われているにもかかわらず、現象としての「ひかり（versions）」が保たれるとみれば、そこに、現象としての《賢治》と、現象としての《versions》という同質性を指摘することもできよう。われわれの目にする膨大な草稿群とは、賢治という現象の《地層断面》であり、《光のカタログ》なのではないだろうか。

さて、本稿では《versions》としての草稿群の読みに焦点をしぼり、次のように三分割して考察してみたい。

ヴァージョン（1）…… 下書稿一から下書稿三の「初形」まで。

ヴァージョン（2）…… 下書稿三の「手入れ」から下書稿五の「手入れ」まで。

ヴァージョン（3）…… 下書稿五の「手入れ」から下書稿六「最終形」まで。

## 二 《時》と《場所》、オリジナル版からの投影

ヴァージョン版の考察に入る前に、《時》と《場所》の問題について述べておかねばならない。《心象スケッチ》の特質として、従来より《時》と《場所》の不変性が指摘されてきた。むろん、《一五八 夏幻想》と《一六五 夏》との合体といった例外の存在も指

摘できるが、《一七九》草稿群の場合、「一九二四、八、一七」の日付がほぼ全ての下書稿に記されており、《時》の不変性は保持されているといえよう。《場所》に關しても同様のことがいえる。詩中の賢治は、岳部落を出發、左手に鶏頭山、中岳、早池峰山の稜線を、右手には薬師岳に連なる稜線を仰ぐかたちで、その谷間を早池峰山の登山口である河原坊の方角へ、真東に歩いていたと推測される。スケッチされた景色は各ヴァージョン間で多少表現上の相違が認められるにしても、基本的に、賢治は同じ場所に立ち同じ景色を書き記している。

「一九二四、八、一七」という《時》においてスケッチされた《場所》が、各ヴァージョンを貫いて保ち続けられているとすれば、《時》と《場所》という不変の要素はオリジナル版においても同じ《時》と《場所》であったといえるだろう。ならば、賢治が草稿群に書き残した《時》と《場所》の事実性を確認しておくことも、それなりの意義があることになる。そこで次に、もう少し詳しく賢治のスケッチした《時》と《場所》について考察しておくことにしたい。

下書稿三に「社務所の方も蒼くひっそり／萱野十里も終りになって／略／路はひとすじしらしらとして／原始の暗い榊林／つめたい霧にはいらつとす」とある。「社務所」とは岳部落にある早池峰神社の社務所のことである。「萱野十里」とはどこか。単に賢治が「萱」の茂った「野」をそのように表現したものととれるが、亀井茂氏が「賢治と早池峰山」(詩・二題を中心にして)、「早池峰」第5号、昭51)で指摘しているように、「萱野十里」とは古くからあった呼び名のようだ。亀井氏は菅原隆太郎著『早池峰山』(岩手日報社、昭28)からの引用として「岳から頂上までの道程は、むかしか

ら茅野十里、木立三十里、川原の坊から頭垢離に至る間は、虎杖立十里、石跛七里と称しているが」との一文を紹介している。直接亀井氏に伺ったところでは、現在と当時では岳から河原坊への道も造りかえられ、周囲の樹木もだいが伐採され、確かなことは分からないとした上で、「萱野」にふさわしい景色は岳部落を出て程なくのところまで、ということである。

さて、賢治は一九二四年八月一七日、岳部落から河原坊に向かう谷間で、どのような夜空を眺めていたのか。その夜空と草稿群に記された夜空とは、どこが同じでどこが異なるのか。私はプラネタリウムを訪れ(注1)、賢治が見たであろう夜空を再現していただくことにした。たとえば賢治は、下書稿二に「じつにそらはひとつの宝石類の大集成で／ことに今夜は古いユダヤの宝石商が／穫れないふりしてかくして置いた金剛石を／みんないちどにあの水底にぶちまけたのだ」と記し、それは「北いちめんの星と嶺線」の夜空であるとしている。「北いちめんの星」とはどのような星座の配置のときに可能なのか。時刻の要素も大きく左右するに違いない。そこで、時刻を「谷の味爽」という詩句から午前三時頃に設定し、プラネタリウムに映し出していたところ、天の川がちょうど天球の北側に、しかも東西に流れていることが確認できた。東に歩行する賢治の視点にたてば、左手北側に「鶏頭山」「中岳」「早池峰山」の稜線が連なり、その上に、天の川が横たわるように輝くのである。また、午前一時頃の設定では、天の川が頭上になってしまい「北いちめんの星」の表現にそぐわないことも分かった。

次に、一九二四年八月一七日における盛岡での日出、日没、月出、月没、月齢を調べて

いただいた。

年	月	日	曜日	日出	日没	月出	月没	月齢
一九二四	八	一七	日	4時48分	18時30分	20時03分	7時01分	16

月の描写も、実際の夜空との異同を知るうえでポイントとなる。栗原敦は「月天使 賢治の月」(『宮沢賢治 透明な軌道の上から』所収。新宿書房、平4)で、賢治の記す月がほぼ正しくその日付における月齢に一致することを指摘している。下書稿三、四に「月は右手の木立の上で/夜中をすぎて熟してゐる」(下書稿三の手入れでは「右手の尾根の上」)、下書稿五、六に「月はいたやの梢にくだけ」、下書稿六の終形に「月はあかるく右手の谷に南中し」とある。当夜の月齢は十六日であるから、計算上、午前三時過ぎには南西の方角、地上から四〇度の高さに見えていたはずで、賢治が「右手の木立の上」や「右手の尾根の上」と記したこととおおよそ符合する。ただ、それらの月の位置が、「右手の谷に南中し」と等しいものと考えると、当夜の月の南中時刻が午前一時二〇分であり、「味爽」(夜明け)近くの時刻に合わないことになる。

草稿群には火星も記されている。下書稿三、五、六に「櫛の脚から火星がのぞき」とあり、一九二四年八月一七日、午前三時二一分における火星の位置を調べると、南西の方角、地平線から約二〇度、みずがめ座に重なる位置に見えていたはずである。「櫛の脚から火星がのぞき」という表現から火星は地上すれすれに見えていたようで、谷間から眺めた場合、その位置にもよるが、実際の火星をスケッチした可能性は高い。その時月は、火星の上方さらに二〇度あたりにあったはずで、賢治にとって、月が「いたやの梢」、火星が「櫛の脚」の高さに見えたことは、ほぼ実景といえるようだ。

### 三 《地上》ヴァージョン

下書稿一から下書稿三の「初形」までは、下書稿一のタイトルが示す「谷の味爽に関する童話風の構想」としてその内容を括弧することができるように思う。「ところがいつか中岳が/次の」(一字不明) 削「けむりを吐いてゐる/半分凍ったその青じろい果肉のへりで/黄水晶とエメラルドとの/花粉ぐらゐの小さな星が/童話のやうに婚約する」といった詩句に、その「童話風」の賢治の《心象》が了解できる。ただ、「童話風」という《心象》が、このヴァージョン段階から加わったものなのか、それとも、オリジナル版スケッチから引き継いだものかは一考を要する。おそらく、「童話風」の詩句が後のヴァージョンにおいても存続することからして、「童話風」の《心象》は、オリジナル版スケッチから引き継がれたものと判断できるだろう。このヴァージョンでは、いまだ、後のヴァージョンの特色をなす思索的要素が出現せず、それだけ、オリジナル版スケッチに近いところで成立している事情が察せられるのである。

なお、オリジナル版スケッチの成立した一九二四年八月一七日から一年後の八月にも、賢治はこの岳部落 河原坊 早池峰山のコースをたどっている。その折りにスケッチされたのが「河原坊」「山の晨明に関する童話風の構想」などの詩であるが、それらもまた数次にわたる下書稿を有しており、賢治がどのようにその一つ一つの《時》と《場所》に

遡ってスケッチを改変、展開していったのかを考えると、『心象スケッチ』なる詩法の尋常ならざるありように、目の眩む覚えのするのは、私一人のことではないだろう。

#### 四 《天界》ヴァージョン

下書稿三の「手入れ」から下書稿五の「手入れ」まで、ここでは、『天界』に對する思索が中心的な主題となっており、すでに「谷の味爽に関する童話風の構想」という下書稿一のタイトルから逸脱した内容になっている。その改変を最も象徴的に表しているのが、「(黒く寂しい香食類の探索者)」という一行の挿入である。賢治は自己を「黒く寂しい香食類の探索者」と規定したのだ。「香食類」とは、おそらく『俱舍論』に記される「食香身」(天や中有の存在をいう)を典拠としたもので、後の引用詩句と考えあわせると、『天人』を意味するとみて間違いはない。賢治はこの段階で、『天人』の存在を夜空に求める「黒く寂しい」探索者と変じたことになる。そして、その自己規定の変化は、次の長大な詩句群を生み出すことになる。

「頭のまはりを円くそり／鼠いろした粗布を着た／坊主らのいふ神だの天が／いつたいどこにあるかと云って／うかつに皮肉な天文学者が／望遠鏡をぐるぐるさせるその天だ／するとこんどは信仰のある科学者が／どこかの星の上あたりに／そういふ天を見附けやうとして／やっぱり眼鏡をぐるぐるまはす／さういふ風な明るい空だ／しかも三十三天は／やっぱりそこにたしかにあって／木もあれば風も吹いてゐる／天人たちの恋は／相見えてえん然としてわらってやみ／食も多くは精緻であつて／香氣となつて毛孔から発する／間違ひもなく／天使もあれば神もある／たゞその神が／あるとき最高唯一と見え／あるとき一つの段階とわかる／さういふこともわからない／それら三十三天は／所感の外ではあるけれども／やっぱりそこに連亘し／恐らく人の世界のこんな静な晩は／修羅も襲つて来ないのだらう」。

ここに展開される『天使』や『神』《三十三天》の實在といつた宗教哲学的な賢治の思索の読み解きは、紙幅の都合で省略せざるを得ないが(注2)、ここでの賢治の思索が、キリスト教的宇宙觀の仏教的宇宙觀への組み込みであることを指摘しておきたい。組み込みという言葉がおだやかでなければ、止揚と表現することもできなくはない。基本的な思索の構造は確かに組み込みとなっているのだが、賢治自身が「さういふこともわからないう」と記したように、その判断を保留にしている分、止揚の意味合いを帯びる。組み込みか止揚といった読みを拒絶している地点に、賢治の全思索が流れ込んでいると読むべきかもしれない。

#### 五 《仏界》ヴァージョン

下書稿五の「手入れ」以降、下書稿六「終形」までになると、そこはもう『天界』ヴァージョンと呼ぶことはできない内容になっている。先に引用した『天界』に関する挿入詩句群が、この段階においてほぼそっくり次の詩句に入れ替えられているからである。「わたくしは狂気のやうにそらをさがす／銀河のなかで一つの星がすべったとき／はてなくひろがると思はれてゐた／そこの星のけむりをとつて／あとに残した黒い傷／その恐ろしい銀河の窓は／いつたいそらのごくだらう／誤つてかあるひはほんたうにか／銀河のそ

と見えなされた／星雲ホシグモの数はどれだらう／普賢菩薩が華嚴で説く／もろもろの仏界のふしぎなカタチ／あるひは花台のカタチをなし／あるひは円くあるひはたひら／それはあるひはその刹那の／覚者の意志により住し／あるひは衆生の業により、／あるひは因縁により住すると／そのどれかゝ星雲で／こゝからやはり見えるだらうか／しかももしたゞ天や餓鬼／これらの国土をもとめるならば／そんなに遠いことでない」。

また、この段階では、あの「（黒く寂しい香食類の探索者）」という《天界》ヴァージョンへの展開を導いた一行も、「いつまでも黒く寂しい／異の空間の探索者」という表現を経て、「狂気のやうに狂気のやうに／銀河の窓を索めるもの」と、異なる意味内容をもつ表現に書き換えられている。「銀河の窓」とは何か。詩句にしたがえば「銀河のなかで一つの星がすべったとき／はてなくひろがると思はれてゐた／そこらの星のけむりをとって／あとに残した黒い傷」ということになるが、これだけでは何のことやら分からない。

この点に関しては、大塚常樹（『宮沢賢治 心象の宇宙論』朝文社、平5）が、アレニウスが『宇宙発展論』（一戸直蔵訳、大3）に述べた「是等の裂目は大なる天体が宏大なる星雲質を通して其途を切り開ける痕を表はすものなるべし」という白鳥座付近の暗黒部分の生成に関する学説と一致することを指摘している。おそらく賢治は、今日「暗黒星雲」と呼ばれる白鳥座付近の暗黒部分を、アレニウスにしたがって銀河の外を覗かせる裂け目、つまり「銀河の窓」とみたのである。

では、その「銀河の窓」から何を覗こうとしたのか。「銀河のそと見えなされた／星雲」である。そして、それは同時に、銀河の外にある《仏界》の存在を確認することであった。賢治は、「銀河のそと見えなされた／星雲」を「普賢菩薩が華嚴で説く／もろもろの仏界のふしぎなカタチ」と認識しようとしたのである。それは、『華嚴経』盧舎那仏品第二に記される次の経文により予言されていたことであった。「仏子よ、諸の世界海に種種の形あり。或は方、或は円、或は方円に非ず、或は水の するが故、或は復た華の形の如く、或は種種の衆生の形をなす者あり」。

\*

私が本稿において試みた、《一七九》草稿群を《地上ヴァージョン》《天界ヴァージョン》《仏界ヴァージョン》の三ヴァージョンに区分することの当否は、賢明なる読者の判断にまかせるとして、私個人として強く印象に残ったことを二つ述べておきたい。

一つは、ヴァージョンごとに変化する賢治の《心象》の不可思議さである。それはあたかも《転生》する《心象》といった観であった。しかもそれは、必ずしも時間の経過にそつたものとい切れないかもしれないのだ。下書稿五の「手入れ」（太く濃い鉛筆）が示すように、《天界ヴァージョン》の推敲と《仏界ヴァージョン》への書き換えが、ほぼ同時期であった可能性が高く、賢治の内部では各ヴァージョン段階でスケッチされた《心象》がシンフォニーのように響きあっていたのではないか。

二つめは、本稿では直接ふれることをしなかつた問題だが、「銀河鉄道の夜」との関係りである。「銀河鉄道の夜」との深い関連はこれまで指摘はされていたものの、あらためて《versions》の視点に立って考えてみると、《地上ヴァージョン》《天界ヴァージョン》《仏界ヴァージョン》の各ヴァージョンが、それぞれに「銀河鉄道の夜」と呼応している事実が見え出し、「銀河鉄道の夜」という物語空間の多重性を考えさせられた。別の機会にじっくりと考察してみたいことである（注3）。

注

(1) 埼玉県越谷市立児童館コスモスのプラネタリウムを利用させていただいた。館長西沢由三氏、秋山和夫氏に感謝申し上げます。

(2) (3) 第二部第一章「銀河世界の成り立ち 神話(宗教)・科学・心理」で言及している。